

出身地 和歌山県和歌山市  
 生年 一八七二（明治五）年七月二十五日  
 没年 一九四五（昭和二十）年十月三日

旧紀州藩士杉村正次郎と同藩医木梨玄庵二女とみとの間に生まれた楚人冠の本名は、広太郎という。母親のみは、子どもの頃から「ひろはん」と読んでいたらしく、もともとの呼び名は「ひろたろう」だったらしい。少年期の彼といえは、背丈だけは高く極端に痩せていたの  
 で、かんざしのお化けとかヒヨロタロとあだ名され、近所の悪童にいじめられることも多かった。後年、海外特派員として活躍し、外国人の知り合いができるトムシユウ・イタロウとかミスタ・ハイロタロとか呼ばれて具合が悪いくともあって、自ら「こうたろう」に統一したようだ。一九〇八（明治四十一年）の世界一周旅行で使用した旅行カバンには、大きく「K. S.」のイニシャルがある。

二歳の時父を失った杉村は母と共に苦勞しながらも、地元の小学校や慶応義塾系の自修学校で学び、一八八四年和歌山中学校（現和歌山県立桐蔭高校）に入学した

仮合格ばかりが続いたようで、すっかり法学がいやになったことと、青年期特有の文学熱に浮かされたことなどがあって、八九年二月に同校の英語予備科に籍を移し、法学修業を途中で諦めてしまった。



杉村楚人冠

その一方で、彼はまたこの年の六月に英学を専門とする国民英学会に入学し、公私にわたり親交を深めることになる博言博士イーストレーキの教えを受けて、九〇年十二月に

が、学級再編問題から校長と衝突し、八六年秋他の生徒と共に退学した。この事件を契機に杉村は、それまでのいじめられっ子の弱虫ヒヨロタロから、たくましい反骨精神の持ち主となって、一人東京へ出る決意を固めたという。

翌八七年の春、母方の叔父を頼って上京した杉村は、この年の九月に英吉利法律学校に入学した。当時の学校は、煉瓦造りの二階建て校舎ができる前で、まだ古い旗本屋敷を使用していたため、杉村によれば、冬になってもストーブはなく、講師の近くに大きな火鉢があるだけで、夜になると低い天井につり下げられたランプに小使が踏み台に乗って一つ一つ灯をつけに回るため、随分講義の腰が折られながら、生徒たちは薄暗いランプの下でノートを必死にとったという。

裁判官か代言人になって、一刻も早く母親を楽にしたと強く望んでいた杉村であったが、勉強の方は落第や

国民英学会を卒業した。その後、杉村は和歌山新報主筆を皮切りに、国民新聞やアメリカ大使館で翻訳や通訳をしたりして、一九〇三年十二月に東京朝日新聞社に入社した。

〇七年、海外特派員としてロンドンに赴いた杉村は、現地から「楚人冠」の筆名で見聞記を書き送り、その的を射た筆致は読者の厚い支持を集め、帰国後それが『大英游記』として出版されると、その筆名は広く知られるようになった。ちなみに、杉村は渡英した年に本学の推薦学員となっている。

杉村楚人冠は、新聞記者としてその後名声を博しただけでなく、社内に調査部やグラフィック局を新設し、また独立した記事審査部を設けるなど新聞社の機構や組織に絶えず新機軸を打ち出し、朝日新聞のみならず日本の新聞界の近代化に努めた。杉村らの尽力によって一〇年本学に独立した学科として新聞研究科が新設されるが、彼にしてみれば、それもまたわが国における大学の近代化を目指したもので、彼一流の先見の明のなせるわざであったのである。